

<図書紹介> 『ヨーロッパ現代哲学への招待』 伊藤直樹、齋藤元紀、増田靖彦、編著 梓出 版社 二〇〇九年

菅沢, 龍文 / SUGASAWA, Tatsumi

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Hosei Society for Philosophy / 法政哲学

(巻 / Volume)

6

(開始ページ / Start Page)

55

(終了ページ / End Page)

55

(発行年 / Year)

2010-06

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008212>

【図書紹介】

『ヨーロッパ現代哲学への招待』

伊藤直樹、齋藤元紀、増田靖彦、編著 梓出版社 二〇〇九年

菅沢 龍文

本書の表題は、ヨーロッパ現代哲学への招待と謳っている。これを見る者はさしあたり、「ヨーロッパ現代哲学」とは何のことだろうか、「招待」とはどういうことなのだろうか、と問いかけるであろう。本書の「招待」においては、三〇〜四〇歳台の新進気鋭の研究者たちが現在の研究関心や研究水準から思想を紹介するので、その生き生きとした叙述に最大の特色があると言えよう。しかも、基本的な専門用語については初出ページの脇に解説が付され、現代哲学に馴染みのない読者も易しく読めるように工夫されている。文献紹介も簡にして要を得ている。それでは、ヨーロッパ現代哲学とは何だろうか。

ヨーロッパの現代哲学で取り上げられる問題のなかでも、第一部「生と哲学」、第二部「現象と解釈」、第三部「差異、他者、外部」という三つの問題圏を本書は主題としている。第一部について見ると、十九世紀以降のヨーロッパ哲学において「生」が大きなテーマとなったことは周知のことであり、本書では、ショーペンハウアー、ニーチェ、デイルタイ、ベルクソンという「生」をテーマとする錚々たる哲学者たちの思想が、これまでになく新鮮な視点も入れて、しかも読み手に分かりやすく紹介されている。

第二部で扱うフッサールを旗頭とする現象学の運動は現代哲学において広く行われた。また、これに解釈学を取り入れたハイデガーの解釈学的現象学も一世を風靡した。本書では、言語、「生の世界（生活世界）」、そして哲学の存在意味にかかわるフッサール哲学と、芸術をめぐるフッサール哲学とが紹介される。その一方でフランスでの現象学運動の中心となったメルロ・ポンティの、知覚と身体についての現象学も紹介される。第二部で異色なのは、ハイデガーの弟子でもあるガダマーの解釈学と、ウイトゲンシュタインの言語哲学とが、「根本的な思考」の共通性に注目して紹介されることであろう。

第三部では、サルトル、デリダ、ドゥルーズといったフランスの哲学者たちの思想が紹介される。サルトルの哲学者としての側面はかつて忘れられた感があったが、「差異」と「他者」の哲学という側面にスポットライトを当てて、そこからサルトルのヒューマニズムの倫理とアンガージュマンの哲学が語られる。また、デリダの説く「脱構築」の意味が分析される。そして最後に、ドゥルーズにおいて哲学とは何であるのか、という本書を締めくくるにふさわしいテーマについて語られる。

本書で取り上げている思想家たちについては、すでに多くの紹介文献がある。そうしたなかで本書は、簡潔であってしかも現在の研究の関心や水準にも触れる意欲的入門書であると言えよう。